

「推し」から広がる大船渡

菊池 恵美

みなさんには、「推し」はいますか。

わたしは、気仙地区に住んで4年目になる40代の女性だ。大船渡市の隣町にある陸前高田市のワイナリーで働いている。葡萄畑で葡萄の世話をしたり、ワインのラベルを貼ったり、ジュースの製造などをしている。

2021年に山形県から移住。移住当時は、コロナ禍ということもあり、なかなか人に出会いに行く機会に恵まれなかった。

だが暮らしているうちに、奇跡的に推しと呼びたい二人に出会うことができた。

推しの存在や文章、写真や言葉から日々の活力をもらっている。

一人目の推しは、しおりちゃん。しおりちゃんは【米澤屋本店】で働く、わたしと同じくらいの年頃の、手仕事が好きな、しっかりとした芯もあるふわっとした雰囲気纏う女性だ。

しおりちゃんのおばあちゃんと偶然にも美容室での席が隣だったことがきっかけで、米澤屋という屋号で酒販店を営んでいることを知った。山形県には米沢市があり、山形県出身のわたしは何か縁があると嬉しく感じた。しおりちゃんのおばあちゃんから

「知り合いが、あなたの勤めている会社で働いていたこともあったのよ。近くに來たら寄ってね。」

と言葉をかけてもらっていたことを思い出して、このご縁を手繰り寄せようと米澤屋本店のInstagramを見た。商品写真の撮り方や丁寧な言葉が、たまらなく好きだなと思った。そして、すぐに、民藝品が好きな人だともわかった。しおりちゃんは、お店の事務全般を担うほか、人と人を繋ぐコミュニケーションツールのひとつでもあるお酒を街の飲食店さんに配達したり、お中元やお歳暮などの贈り物やお祝いとして使いたいという個人のお客さまの対応もしているという。町の敬老会でのお祝いを用意したりするなど、地域に根付いた仕事もしているそうだ。

「以前、栃木県の益子町で器を作る仕事をしていたことがあったの。」と直接会った時に聞いたため、民藝好きなわたしはさらに興味が湧いた。その後もInstagramを見ては、推しのおすすめするお酒をチェックしている。

二人目の推しは、作家のくどうれいんさん。『わたしを空腹にしないほうがいい』という書籍かられいんさんの文章が好きになった。ある時、れいんさんが、私の働いてる職場のワインとクラフトジュースを文章で紹介しているweb記事を見つけ、わたしは飛び上がるように喜んだ。わたしがラベリングしたワインやジュースがどんな人に届いているか気になっていたからだ。推しの手元にも届いているなんて、びっくりした。そして、2024年の4月に盛岡の書店BOOKNERDで『コーヒーにミルクをいれるような愛』のサイン会があった。好きな人にサインを貰いにいくという経験がなかったわたしは、これこそ、推し活というものだねと心が躍った。そのサイン会で何気なくした会話で、れいんさんが大船渡と縁があることを知った。わたしも大船渡市に住んだことがあり、なんだろう、この偶然はと思いながら、その後も推しの文章や姿から元気や笑いをもたらしている。

さらに、推しの二人に共通点が見つかった。わたしは、日本酒も好きで、よく米澤屋本店のInstagramを見ているうちに、気になる商品が現れた。「岩手の日本酒の魅力」を発信するために岩手県の若手の会「青年醸友会」に加盟している7つの酒蔵（「南部美人」「岩手誉」「酔仙」「鷺の尾」「浜娘」「堀の井」「菊の司」）によって開発された、「岩手の酒」という意味で岩酒を音読みした「ganshu（がんしゅ）」。2024年ものにれいんさんの短歌が添えられている。二人の推しとわたしが好きなものを通して繋がったような気がした。

「推し」がいる幸せは、好きな人やものが連想ゲームのように繋がっていく過程が面白い。その過程に大船渡が関わっている。そうになると、推しが好きなわたしは、さらに大船渡のことを好きになり知りたくなる。大船渡で見えるキラキラした海面のように、わたしの生活がますます輝いていく。

わたしが二人の推しと出会ったように、このコラムを読んだみなさんの推しも、もしかしたら大船渡で見つかることもあるかもしれませんね。

【まちおし AWARD 添削プログラムを受けての感想】

まちおしAWARD添削プログラムでは、内澤稲子講師、鈴木いづみ講師、手塚さや香講師の3人から、提出した文章の添削をして頂きました。

添削内容は、少し辛口に感じる部分もありましたが、新たな視点での気づきを得ることができました。

相手に伝わる文章を書くためには、抽象的ではなく、「なぜ」「なんのために」を意識して具体的に説明し、言葉や言い回しを考えるようにすることが大切だと思いました。

これを機に、引き続き大船渡市の魅力を探しながら、言葉で紡いでいけるように文章力を重ねていきます。

この度は、まちおしAWARD添削プログラムに参加させていただきありがとうございました。

菊池 恵美